

LGBTQ+に関する学内環境アンケート調査報告書（学生対象）

「LGBTQ+に関する学内環境アンケート調査（学生対象）」は、APUの学生が、性的指向および性自認に関する、学生生活や支援制度、そして学内環境をどのように経験しているかを把握することを目的に実施された。ここでいう「学内環境」とは、教室、APハウス、サークル・クラブ活動などの課外活動、また学生同士、教職員との関わりの中で、学生がどの程度安心感や尊重、支援を感じられているかを含む、大学全体の雰囲気や環境を指す。

目次

1. はじめに.....	3
2. 調査および報告書の目的.....	3
3. 調査方法.....	3
3.1 回答数.....	3
3.2 倫理的配慮および匿名性.....	4
4. 回答者属性.....	4
4.1 国籍.....	4
4.2 所属学部・院生.....	4
4.3 在籍セメスター.....	5
4.4 LGBTQ+当事者であるか.....	5
4.5 性自認（Gender Identity）.....	6
4.6 性的指向（Sexual Orientation）.....	6
5. 学内環境とインクルーシビティ（包括性）.....	7
5.1 LGBTQ+学生にとっての学内環境に関する認識.....	7
5.2 学内における自己表現.....	8
5.3 自由記述回答.....	8
5.4 クロス集計：LGBTQ+当事者学生と非当事者学生の比較.....	9
6. イベント・サークル活動・授業におけるインクルーシビティ.....	10
6.1 イベント・サークル活動・授業におけるLGBTQ+学生へのインクルーシビティ.....	10
6.2 自由記述回答.....	10
7. ジェンダー代名詞の共有.....	11
7.1 ジェンダー代名詞を共有する頻度と場面.....	11
7.2 実践に影響を与える文化的・言語的・社会的要因.....	11
7.3 自由記述回答.....	12
8. 差別の経験、相談・報告体制、および大学による支援.....	12
8.1 差別の経験と頻度.....	12

8.3 相談・報告後の支援体制に対する満足度.....	14
9. APU「性の多様性に関する基本方針」	15
9.1 学生の認知度	15
10. 学生が求める支援・取り組み.....	15
11. 自由記述回答	16
12. 2015 年と 2025 年の比較概要	17
12.1 10 年後の APU における学内環境.....	17
12.1.2 10 年後の LGBTQ+当事者学生の認識	18
12.1.3 10 年後の非 LGBTQ+学生の認識.....	18
12.2 10 年後の差別的な発言やからかいの経験	19
12.2.1 10 年後の LGBTQ+当事者学生の認識	20
12.2.2 10 年後の非 LGBTQ+学生の認識.....	21
13. 総括.....	21
13.1 今後に向けて	22

1. はじめに

多様な文化、アイデンティティ、価値観によって形成される国際社会において、人々の生き方や経験が多様であることは自然なことである。APU では、こうした多様性を、学びと共生を支える重要な要素として捉えている。

APU は、「自由・平和・ヒューマニティ」「国際相互理解」「アジア太平洋の未来創造」という理念のもと、多様性を尊重し、より包摂的で平和な社会の実現に貢献できる「世界市民」の育成を目指している。そのためには、すべての学生が安心して、自分らしく学び、生活できるキャンパス環境を実現することが不可欠である。

また、APU は、以下の「性の多様性に関する基本方針」を定めている。

「立命館アジア太平洋大学は、基本的人権の尊重という観点から、性の多様性を尊重します。いかなる性的指向や性自認の学生も人権侵害を受けず、また、性的指向や性自認を理由に不利益な扱いをされることも不快な思いや苦痛を受けることなく、本学において学修し、学生生活を送る環境を整えます。」

2. 調査および報告書の目的

本調査（LGBTQ+教職員に対する学内環境に関するアンケート調査）は、性的指向および性自認に関連して、学生がどのように学生生活を経験しているかを把握することを目的として実施した。

また、本調査は、2015 年に実施された前回の LGBTQ+に関する学内環境アンケート調査から 10 年を経て実施されたものであり、APU の発展と多様化が進む中で、LGBTQ+学生の経験やキャンパス環境がこの 10 年間でどのように変化してきたかを振り返る機会ともなっている。

3. 調査方法

2025 年 APU 学内環境アンケート調査は、2025 年 6 月 20 日から 2025 年 7 月 20 日までの約 1 か月間にわたり実施された。本調査は、学生代表と学生部 LGBTQ+リエゾンオフィサーが協働して作成したものであり、2015 年に実施された「LGBT 学生実態調査」の設問構成や内容をもとに、比較が可能となるよう設計されている。

調査は Microsoft Forms を用いてオンラインで実施し、回答は匿名で、英語または日本語のいずれかで回答できる形式とした。また、学生対象調査と教職員対象調査をそれぞれ別に作成した。調査の周知は、Campus Terminal での告知、教室や学内施設に設置した QR コード付きポスター、ならびに APU 公式 Instagram での投稿を通じて行った。

3.1 回答数

全体で 322 件（学生 241 件・教職員 81 件）の回答が寄せられた。

学生対象調査

- 英語での回答：121 件
- 日本語での回答：120 件
 - 学生回答総数：241 件

教職員対象調査（詳細は学生対象アンケート結果を参照）

- 英語での回答：36 件
- 日本語での回答：45 件
 - 教職員回答総数：81 件

3.2 倫理的配慮および匿名性

調査では、氏名、学生番号、連絡先など、個人を特定できる情報は収集していない。回答は任意とし、国籍についても回答必須項目とはしていない。

4. 回答者属性

本調査では、241 件の学生回答が得られた。回答結果をより適切に理解・分析するため、国籍、所属学部・研究科、在籍セメスター、LGBTQ+当事者であるかどうか、性自認（Gender Identity）、性的指向（Sexual Orientation）に関する属性情報を収集した。

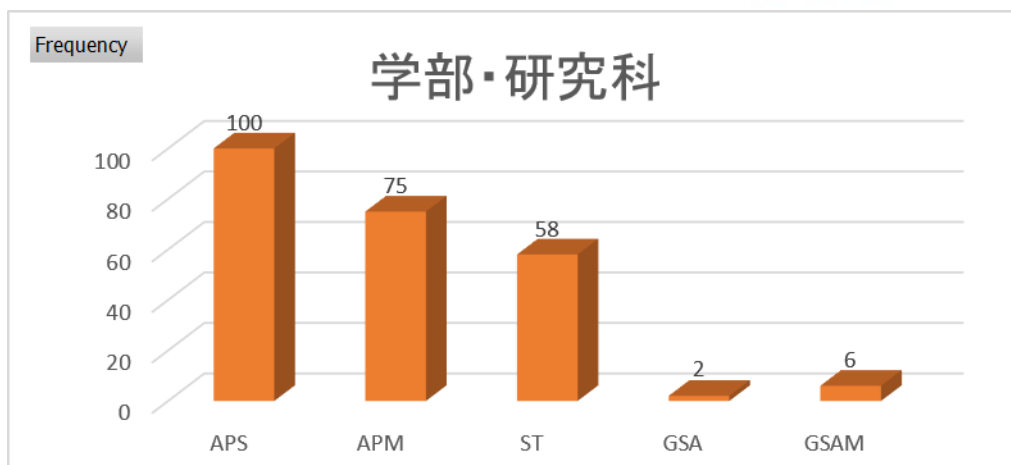
4.1 国籍

回答者は多様な国・地域にわたっていた。最も多かったのは日本国籍の学生（116 名）であり、次いでインドネシア（8 名）、ミャンマー（8 名）、ベトナム（7 名）、バングラデシュ（7 名）、韓国（5 名）などが続いた。このほかにも、さまざまな国・地域出身の学生から回答が寄せられた。なお、54 名の回答者は国籍を「回答しない」を選択した。

4.2 所属学部・研究科

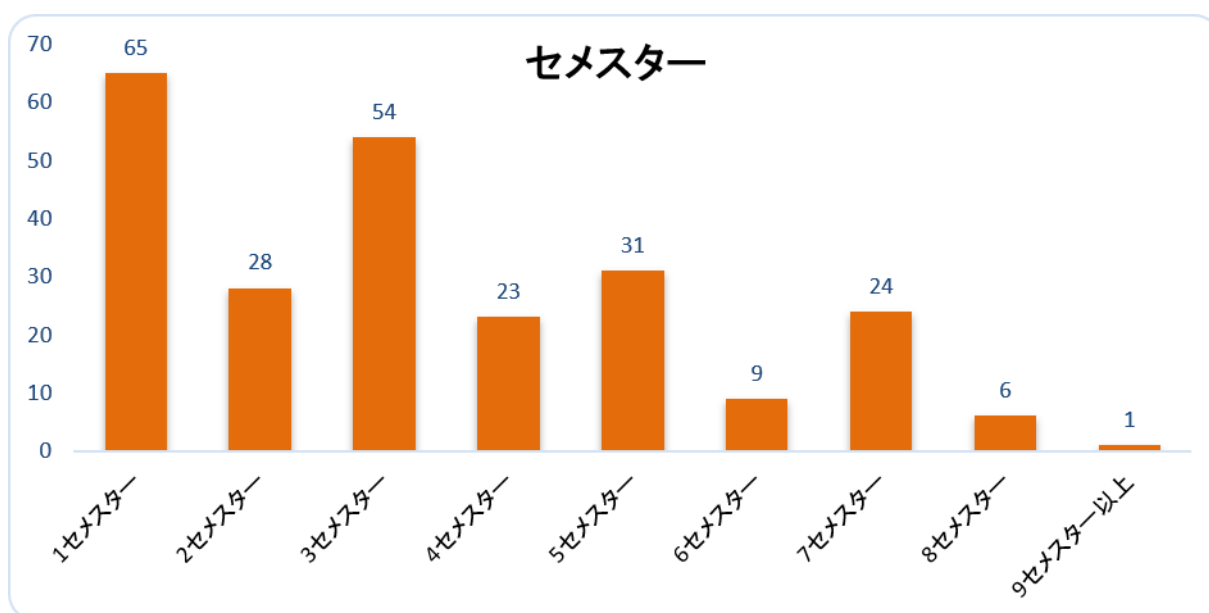
回答者は、APU の各学部・研究科にわたって分布していた。

- アジア太平洋学部（APS）：100 名
- 国際経営学部（APM）：75 名
- サステナビリティ観光学部（ST）：58 名
- アジア太平洋研究科（GSA）：2 名
- 経営管理研究科（GSAM）：6 名



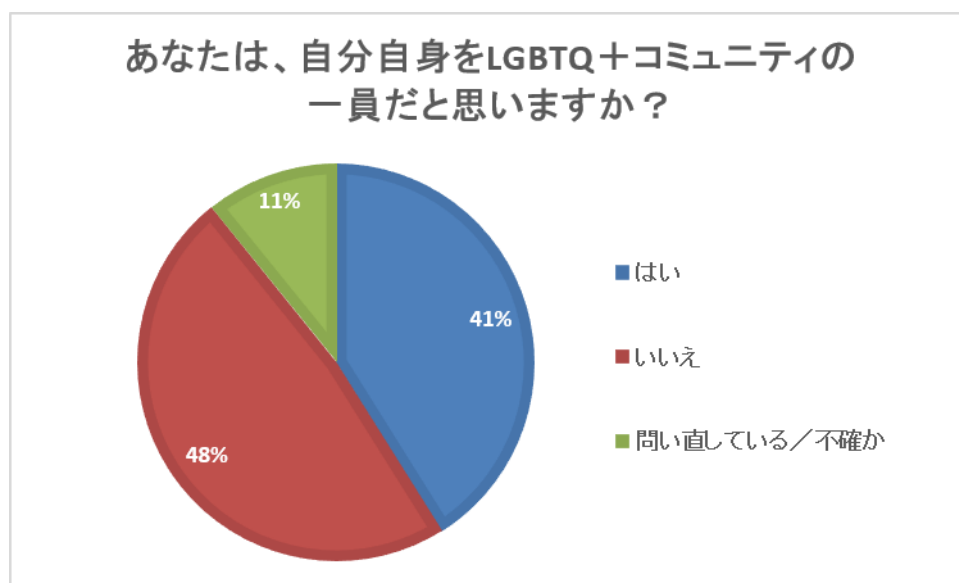
4.3 在籍セメスター

全てのセメスターの学生から回答が寄せられた。最も多かったのは1セメスター生（65名）であり、次いで3セメスター生（54名）、5セメスター生（31名）が続いた。また、7セメスター生（24名）や、8セメスター以上の学生（7名）など、上級セメスターの学生からの回答も確認された。



4.4 LGBTQ+当事者であるか

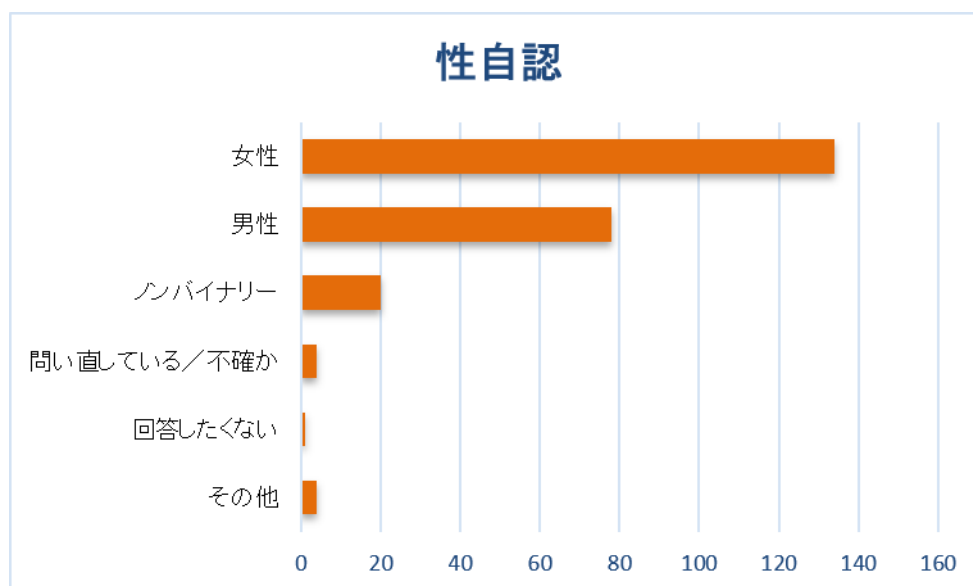
回答者のうち、115名の学生が自身をLGBTQ+コミュニティの一員であると回答し、126名の学生が「当事者ではない」と回答した。この構成により、LGBTQ+当事者の学生による実体験と、学生全体による学内環境への認識の双方を把握することが可能となった。



4.5 性自認 (Gender Identity)

回答者の多くは、自身の性自認を女性（134 名）または男性（78 名）と回答した。

そのほか、20 名がノンバイナリー、4 名が「問い直している／不確か」と回答し、4 名が「その他」を選択した。「その他」には、ジェンダーフルイド、ジェンダーニュートラル、トランスジェンダーなどの回答が含まれていた。なお、1 件は無回答であった。

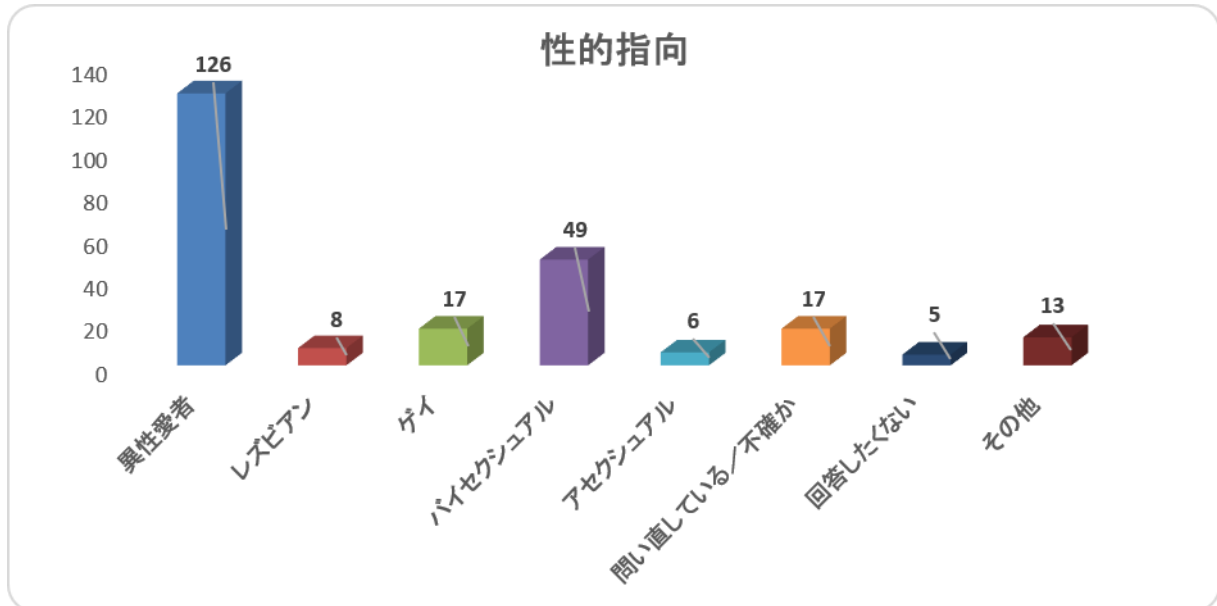


4.6 性的指向 (Sexual Orientation)

回答者の多くは、自身の性的指向をストレート／ヘテロセクシュアル（126 名）と回答した。その他の回答として、バイセクシュアル（49 名）、ゲイ（17 名）、レズビアン（8 名）、アセクシュアル（6 名）などが挙げられた。また、「その他」（12 名）には、クィア（Queer）やバイキュリアス（Bi-

curious) などの回答が含まれていた。

加えて、17 名が「問い直している／不確か」と回答し、5 名が「回答しない」を選択した。なお、1 件は無回答であった。

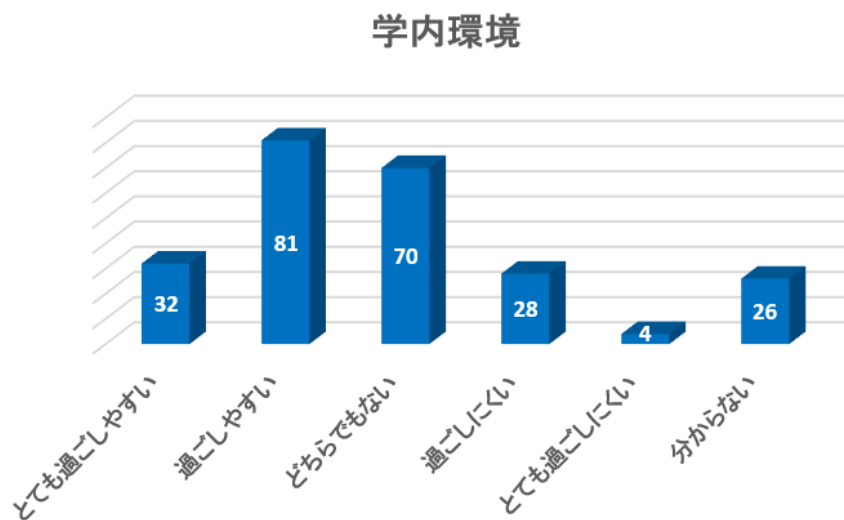


5. 学内環境とインクルーシビティ（包括性）

5.1 LGBTQ+学生にとっての学内環境に関する認識

「APU は LGBTQ+学生に対してどのような環境だと思いますか？」という質問に対して、回答はさまざまであった。最も多かったのは、「過ごしやすい」(81 名) および「とても過ごしやすい」(32 名) という肯定的な回答であり、合計 113 名となった。

一方で、「どちらでもない」と回答した学生は 70 名、「過ごしにくい」は 28 名、「とても過ごしにくい」は 4 名であった。また、「分からない」と回答した学生も 26 名いた。これらの結果から、多くの学生が APU を LGBTQ+学生にとって比較的過ごしやすい環境だと認識している一方で、中立的・不確実な認識や、過ごしにくさを感じている学生も一定数存在することが分かる。

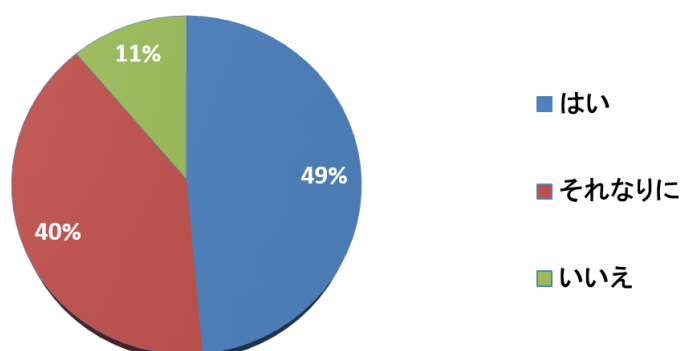


5.2 学内における自己表現

「APU の環境は、誰にとっても自分を表現しやすい環境だと思いますか？」という質問に対して、「はい」と回答した学生は 117 名、「それなりに」と回答した学生は 97 名であった。

一方で、27 名の学生は「いいえ」と回答しており、すべての人が自由に自分を表現できる環境ではないと感じていることが示された。

APUの環境は、誰にとっても自分を表現しやすい環境だと思いますか？



5.3 自由記述回答

自由記述回答からは、学生が APU における LGBTQ+インクルーシビティや自己表現について、どのように感じているのかについて、より具体的な声が確認された。全体として、回答は肯定的な意見、中立的・不確実な意見、否定的な意見に大きく分けられた。

肯定的な回答では、APU の多様性や、自分らしくいられる自由な雰囲気の評価する声が多く見られた。複数の学生が、学生同士のオープンな雰囲気や、自己表現を制限されていないと感じていることを述べている。例えば、ある学生は「ファッションやアートなど、さまざまな形で自由に自己表現できる」と回答し、別の学生は「周囲に判断されることを恐れず自由に自己表現できている」と述べた。また、「多くの学生が自分のクィア性についてオープンであり、それが他の人の自己表現もしやすくしていると思う」や、「APU の学生は比較的オープンマインドで、見た目や性別で他人を判断しない人が多いと思う」といった声も見られた。

中立的・不確実な回答では、学生によって経験に差があることが指摘された。APU の多様性を評価しつつも、文化的背景によって自己表現のしやすさが異なるという意見が見られた。ある学生は、「APU は基本的にオープンな環境だと思うが、多様な文化や国籍の学生がいるため、安心して自己表現できないと感じる人もいると思う」と述べている。また、「LGBTQ+が広く受け入れられていない国から来ている学生も多く、噂や否定的なコメントを避けるために、自分をあまり表に出さない学生もいる」という意見もあった。このような不確実さは、「自由に自己表現できる機会は多いが、外見や性的アイデンティティ、価値観などによって他人を判断する保守的な考え方を持つ学生もまだ存在する」という声にも表れていた。

否定的な回答では、不安感や同調圧力、支援不足に関する声が見られた。一部の学生は、差別的な発

言や、目立たない形での偏見を経験していると述べている。例えば、ある学生は「クィアの学生には、目立たずホモフォビックな発言から身を守るために、一定の基準に合わせるようなプレッシャーがある」と回答した。また、「公にはしなくても、私的な場で強いホモフォビックな発言をする人に多く出会った」という経験も共有された。さらに、「APU 自体が明確に差別的というわけではないが、ホモフォビックな学生は存在しており、そのために安心できないと感じる環境になっている」というように、環境面への懸念も挙げられた。

全体として、これらの回答から、多くの学生が APU を比較的インクルーシブな環境だと認識している一方で、安心感や包摂性の感じ方はすべての学生に共通しているわけではないことが分かる。今後、すべての学生が安心して自分らしく過ごせる学内環境づくりに向けた継続的な取り組みが重要であることが示唆された。

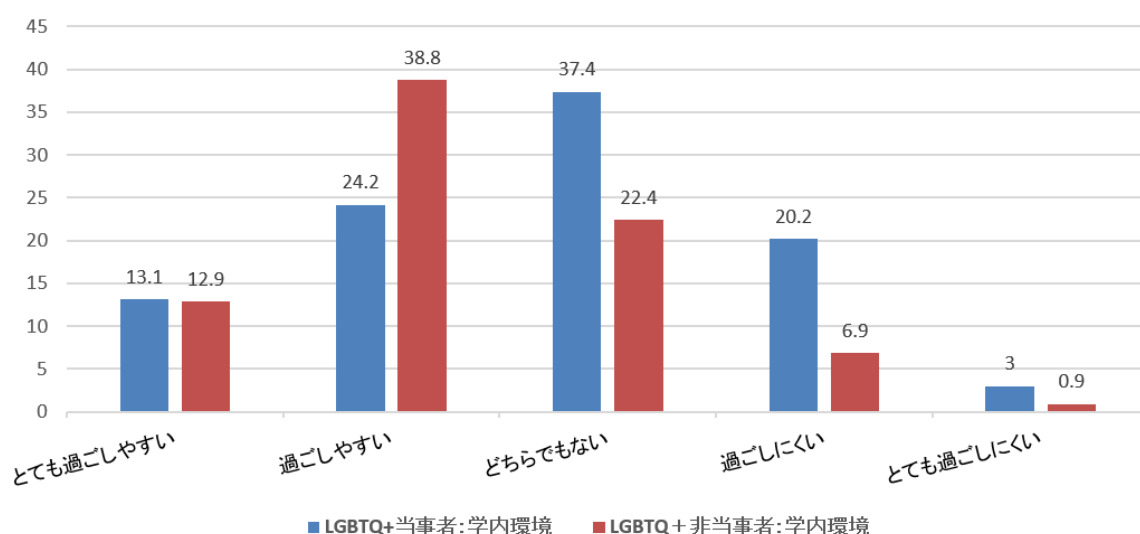
5.4 クロス集計：LGBTQ+当事者学生と非当事者学生の比較

非 LGBTQ+学生の回答では、学内環境を肯定的に捉える傾向が比較的強く見られた。「とても過ごしやすい」(12.9%) および「過ごしやすい」(38.8%) を合わせると、51.7%の学生が APU を肯定的に評価していた。一方で、「過ごしにくい」(6.9%) および「とても過ごしにくい」(0.9%) と回答した学生は合計 7.8%であった。

一方、LGBTQ+当事者学生の回答では、より複雑な傾向が見られた。「とても過ごしやすい」(13.1%) および「過ごしやすい」(24.2%) を合わせた肯定的回答は 37.3%であった。一方で、「過ごしにくい」(20.2%) および「とても過ごしにくい」(3.0%) を合わせると 23.2%となり、非当事者学生と比較して、過ごしにくさを感じている割合が高いことが確認された。

これらの結果から、非 LGBTQ+学生が持つ学内環境への認識と、LGBTQ+当事者学生が実際に経験している環境との間には、一定の差が存在していることが示された。

学内環境：LGBTQ+当事者と非当事者の比較



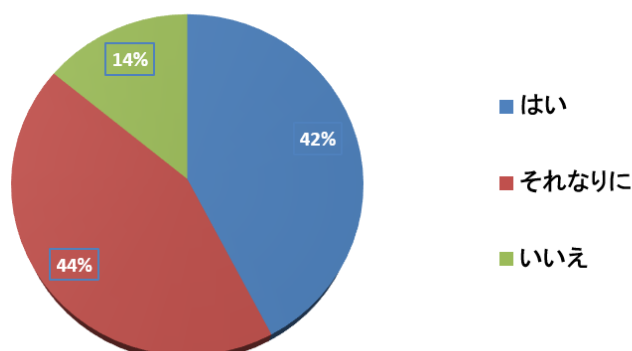
6. イベント・サークル活動・授業におけるインクルーシビティ

6.1 イベント・サークル活動・授業における LGBTQ+学生へのインクルーシビティ

「学内で行われるイベント、サークル活動や授業は LGBTQ+学生にとってインクルーシブだと思いますか？」という質問に対して、回答結果からは、全体として一定程度のインクルーシブさが認識されている一方で、意見が分かれていることが分かった。241 名の回答者のうち、「はい」と回答した学生は 102 名 (42.3%)、「一定は」と回答した学生は 105 名 (43.6%) であった。

一方で、「いいえ」と回答した学生は 34 名 (14.1%) であった。

学内で行われるイベント、サークル活動や授業はLGBTQ+学生にとって
インクルーシブだと思いますか？



6.2 自由記述回答

自由記述回答からは、APU におけるイベント、サークル活動、授業のインクルーシビティについて、多様な経験や認識が示された。肯定的な回答では、「学生は、自分のアイデンティティによって特別視されたり、厳しく見られたりすることなく、安心して過ごしている」といった意見が見られた。また、「Out and About のおかげで、LGBTQ+コミュニティの可視化や、安心して自分らしくいられる場がある」というように、学生主体の取り組みを評価する声もあった。

一方で、多くの回答では、インクルーシブさが学内全体で均一ではないことが指摘された。特に、教員やサークル・団体の運営者によって経験に差があるという意見が見られ、ある学生は「誰が教えているか、誰が参加しているかによって変わる」と述べている。また、授業内での可視性の低さについて、「多くの教員やサークル、イベントではクィアに関する表現やストーリーがほとんど扱われていない」や、「クィアの視点に関する議論はあまりなく、レインボーウィークやクィア系サークルなど、明確にクィアをテーマにした場に限定されている」といった声も見られた。

より否定的な回答では、疎外感や、大学としての継続的な支援不足に関する懸念が示された。例えば、ある学生は「このテーマに取り組んでいる特定のサークルでなければ、自分のアイデンティティを安心して開示できるとは思わない」と述べている。また、「一部の教職員は、これらの課題についてもっと理解を深める必要がある」という意見も見られた。これらの回答から、APUにはインクルーシブな場や取り組みが存在する一方で、その経験はすべてのイベント、サークル活動、授業において一貫して共有されているわけではないことが示唆された。

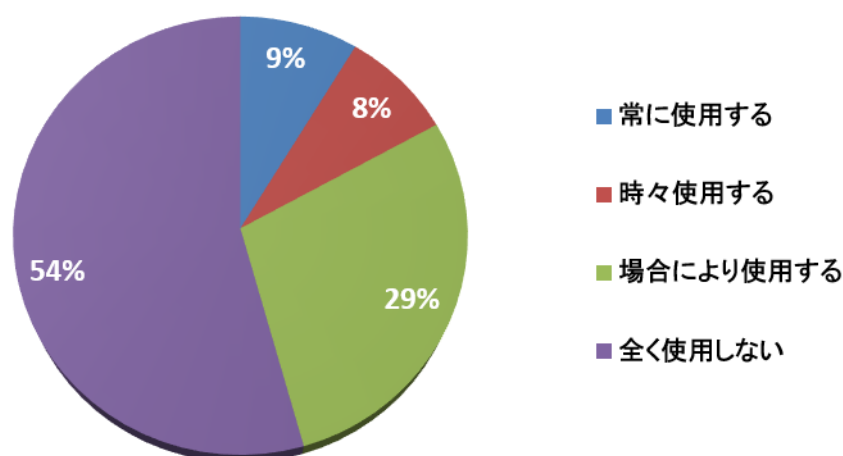
7. ジェンダー代名詞の共有

7.1 ジェンダー代名詞を共有する頻度と場面

「あなたは、自己紹介をする時にジェンダー代名詞（＜彼・he/him＞＜彼女・she/her＞＜彼ら彼女ら・they/them＞）を使用しますか？」という質問に対して、多くの学生が、自己紹介の際に日常的にジェンダー代名詞を共有していないことが分かった。241名の回答者のうち、「全く使用しない」と回答した学生が131名と最も多かった。

一方で、状況によって使い分けている学生も多く、「場合により使用する」と回答した学生は69名であった。また、「時々使用する」は20名、「常に使用する」は21名であった。これらの結果から、ジェンダー代名詞の共有は、学生の間で一般的な慣習として定着しているというよりも、状況や相手に応じて判断されている傾向が見られた。

あなたは、自己紹介をする時にジェンダー代名詞（彼、彼女、彼ら・彼女ら）を使用しますか？



7.2 実践に影響を与える文化的・言語的・社会的要因

ジェンダー代名詞を共有するかどうかには、文化的・言語的背景が大きく影響していると考えられる。例えば、日本語では英語と異なり、日常会話において主語や代名詞を省略することが一般的であり、丁寧さや自然な会話の流れを保つためにも、あえて代名詞を明示しない場合が多い。そのため、自

己紹介の際にジェンダー代名詞を共有する必要性が感じられにくい側面があると推測される。

また、ジェンダー代名詞を共有する文化や実践そのものに馴染みのない学生も一定数存在しており、特に多文化・多言語環境においては、相手がジェンダー代名詞について理解をしているかという不安や、ジェンダー代名詞を使いたいが使うのに安全な環境なのかが判断できず、戸惑いやためらいにつながっている可能性が考えられる。

7.3 自由記述回答

「自己紹介をする時に、なぜジェンダー代名詞を使用しますか、もしくは使用しませんか？理由を教えてください」という質問に対する自由記述回答からは、学生によってジェンダー代名詞の共有に対する考え方や実践が大きく異なっていることが分かった。特に、その判断は状況や文化的背景、自分が安心できる環境かどうかによって強く影響されていることがうかがえた。

一部の学生は、ジェンダー代名詞の共有を前向きで意味のある行為として捉えていた。例えば、ある学生は「誰かが代名詞を共有している時には、自分も共有することが大切だと思うし、相手に安心してもらいたい」と述べている。また、「自分のアイデンティティを相手に知ってもらうため」といった理由を挙げる学生も見られた。

一方で、多くの回答は、状況に応じて判断するという中立的・限定的な姿勢を示していた。7.2でも述べたように、文化的・言語的背景に言及する回答が多く、ある学生は「自分の文化では、そのようなジェンダー化された代名詞自体が存在しない」と説明している。また、「相手や状況を見て判断する。安心できる相手だと思った場合には、もう少し詳しく話す」と述べる学生もいた。これらの回答から、ジェンダー代名詞の共有は、多くの学生にとって当然の習慣というより、慎重に判断しながら行われていることが分かる。

より否定的な回答では、周囲から特別視されることへの不安や、否定的な反応への懸念が示された。例えば、「代名詞を共有するだけでも、クィアコミュニティに近い人だと思われてしまう。仲間外れにされるのが怖い」、「以前はいつも共有していたが、年々それが精神的に疲れるようになってきた。壁に向かって戦っているように感じる」という回答もあった。

全体として、これらの回答から、APUにおけるジェンダー代名詞の共有は、環境依存的な実践であり、受容されるかどうかという感覚、文化的背景、そして安心・安全への不安によって大きく左右されていることが示唆された。

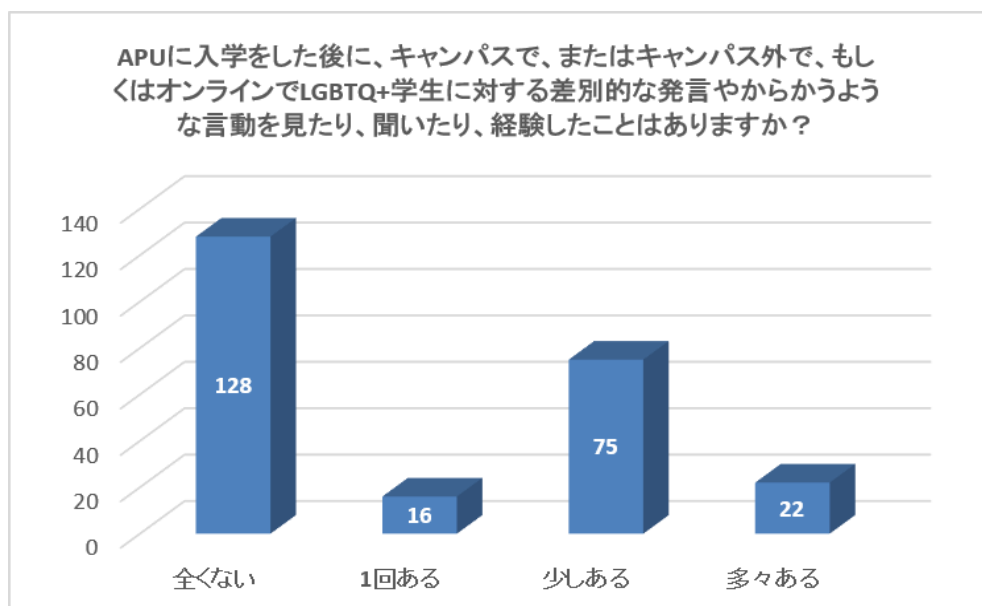
8. 差別の経験、相談・報告体制、および大学による支援

8.1 差別の経験と頻度

「APUに入学をした後に、キャンパスで、またはキャンパス外で、もしくはオンラインでLGBTQ+学生に対する差別的な発言やからかうような言動を見たり、聞いたり、経験したことはありますか？」という質問に対し、241名の回答者のうち、128名が「全くない」と回答した。

一方で、113名の学生は何らかの差別的な言動を見聞きした、または経験したと回答しており、その

内訳は、「1回ある」が16名、「少しある」が75名、「多々ある」が22名であった。これらの結果から、多くの学生は直接的な差別を経験していない一方で、学内コミュニティの中では、差別的な言動が一定程度認識されていることが分かった。



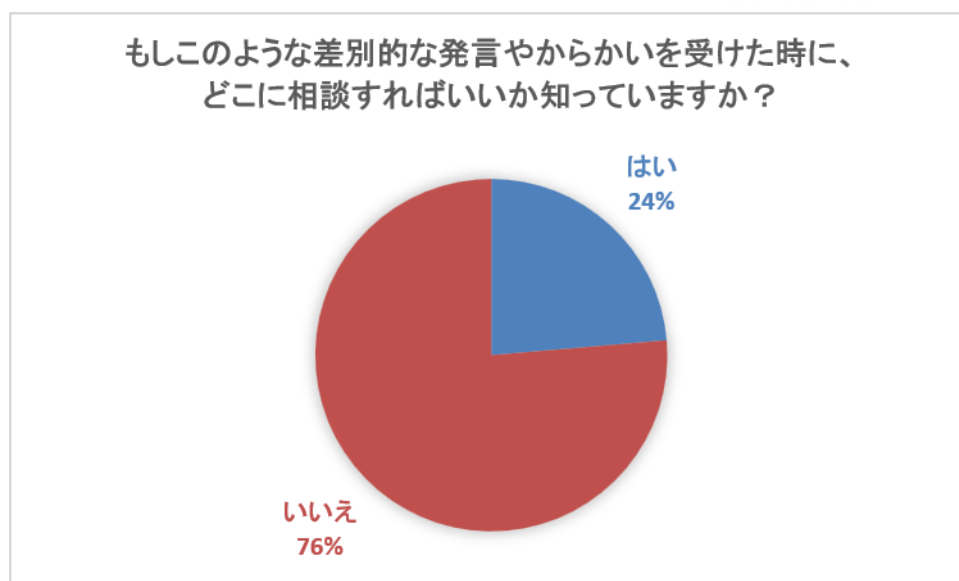
なお、自由記述回答からも、自身が直接経験していなくても、他者に対する差別的な発言や行動を見聞きしたとする声が多く見られた。

プライバシーおよび守秘義務の観点から、回答者が共有した具体的な事例については本報告書では掲載しない。ただし、今後の支援体制の改善や、差別の防止・対応に関する方針検討の参考資料として、匿名性を保持した上で学内で活用していく予定である。

8.2 相談・報告体制に関する認知度

「もしこのような差別的な発言やからかいを受けた時に、どこに相談すればいいか知っていますか？」という質問に対して、差別に関する相談・報告先について認知している学生は57名にとどまり、184名の学生は「知らない」と回答した。

この結果から、差別に関する相談・報告体制について、学生への周知が十分に行き届いていない可能性が示唆された。

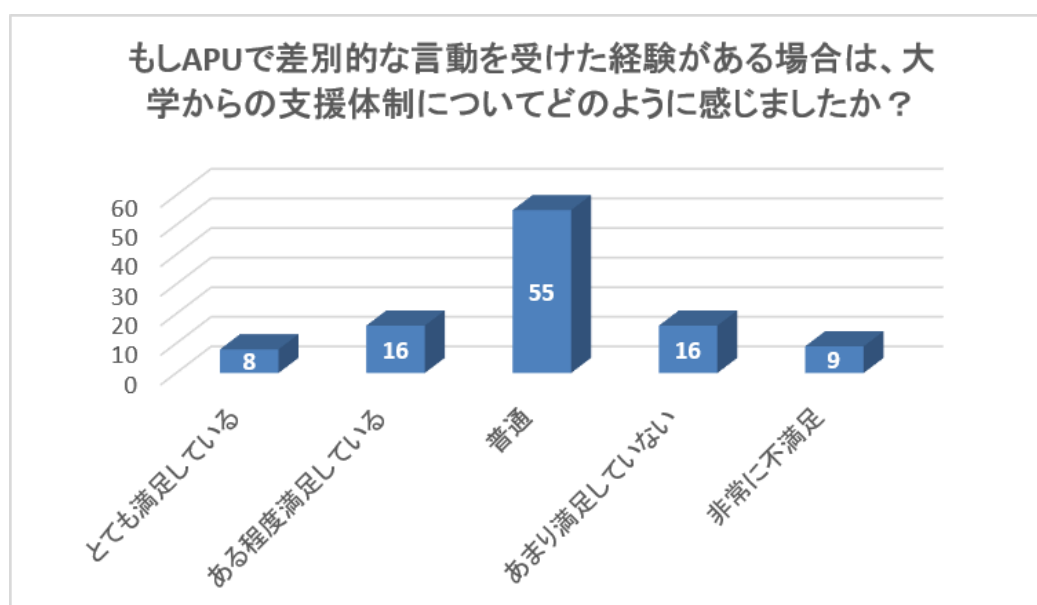


8.3 相談・報告後の支援体制に対する満足度

「もし APU で差別的な言動を受けた経験がある場合は、大学からの支援体制についてどのように感じましたか？」という質問に対して、大学の対応や支援体制に対する満足度にはばらつきが見られた。

「とても満足している」と回答した学生は 8 名、「満足している」は 16 名であった。一方で、最も多かった回答は「どちらでもない」で、55 名であった。

また、「あまり満足していない」は 16 名、「全く満足していない」は 9 名であり、大学による支援や対応の実効性については、学生によって受け止め方に差があることがうかがえた。

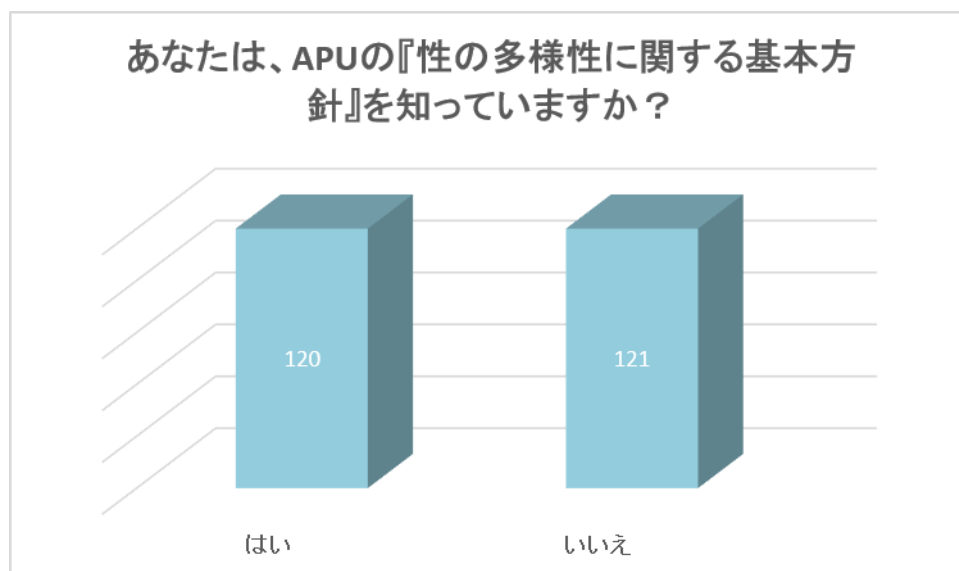


9. APU「性の多様性に関する基本方針」

9.1 学生の認知度

「あなたは、APUの『性の多様性に関する基本方針』を知っていますか？」という質問に対して、学生の認知度はほぼ二分される結果となった。241名の回答者のうち、120名の学生が「はい」と回答した一方で、121名の学生は「いいえ」と回答した。

これらの結果から、APUは性的指向や性自認にかかわらず、すべての学生の人権を尊重し、公平でインクルーシブな環境づくりを目指す姿勢を示しているものの、その方針についての認知は、学生全体に十分浸透しているとは言えないことが示唆された。

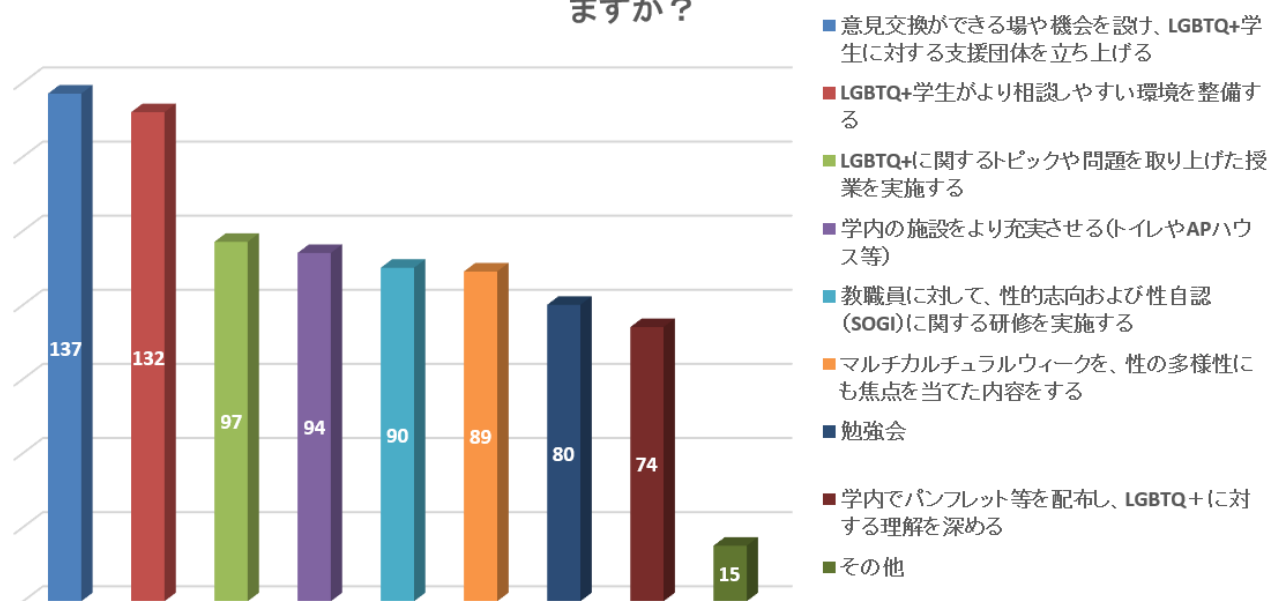


10. 学生が求める支援・取り組み

「あなたは大学がLGBTQ+学生に対して更にどのような支援ができると思いますか？」という質問に対する回答から、学生が求める支援の傾向が明らかになった。特に多く選ばれたのは、「意見交換ができる場や機会を設け、LGBTQ+学生に対する支援団体を立ち上げる」(137件)と、「LGBTQ+学生がより相談しやすい環境を整備する」(132件)であった。これらの結果から、学生同士がつながり交流できる環境づくりと、よりアクセスしやすい相談体制の整備に対するニーズが高いことがうかがえる。

また、「LGBTQ+に関するトピックや問題を取り上げた授業を実施する」(97件)、「学内の施設をより充実させる(トイレやAPハウス等)」(94件)、「教職員に対して、性的指向および性自認(SOGI: Sexual Orientation and Gender Identity)に関する研修を実施する」(90件)についても、多くの学生が必要を感じていることが分かった。

あなたは大学がLGBTQ+学生に対して更にどのような支援ができると思いますか？



11. 自由記述回答

(その他、何かご意見があれば記入してください。)

追加意見を求めたところ、学生からは、LGBTQ+に関する APU のインクルーシブな環境について、安心感や評価を示す声から、不安や課題意識を含む声まで、幅広い意見が寄せられた。

英語で寄せられた回答において、肯定的な回答では、APU の取り組みに対する感謝や、比較的安心して自分らしくいられる環境であるという意見が多く見られた。例えば、「このアンケートを実施してくれてありがとうございます。現在そして将来の APU 生にとって、とても役立つと思います」といった声や、「自国と比べると、APU では自分を表現できる余裕を感じられる。APU は安心できる場所になり得る」といった意見があった。一方で、自身のアイデンティティを特別視されるのではなく、自然なものとして受け止めてほしいという声も見られた。ある学生は、「特別扱いを望んでいるわけではなく、同じ空間にいる存在として自然に認識されたいだけです」と述べている。

日本語で寄せられた回答でも、同様の傾向が見られた一方で、カミングアウトしていない学生の複雑な思いも共有された。例えば、「私は LGBTQ コミュニティの一員ですが、まだカミングアウトしていないため、その支援の輪に自分が含まれていないように感じることがあります」という意見があった。また、「LGBTQ の人同士が静かにつながれる場所がほしい」や、「オープンにしている教職員や学生がいれば、相談しやすくなり、孤立感も減ると思う」といった声からは、つながりや可視化へのニーズもうかがえた。

中立的・複合的な回答では、LGBTQ+を特別なものとして扱うべきかについて、より慎重で実践的な視点も見られた。例えば、「異性愛者であっても同性愛者であっても、同じコミュニティの一員であることに変わりはない」という意見や、「LGBTQ のあり方が“普通”のものとして認識されることが理想だと思う。授業やパンフレットなどで特別に扱う必要があるのかは疑問もある。(もちろん、その目的に向けた取り組みであることは理解している。) 個人的には、誰もが過ごしやすい環境づくりに重点を置く

方がよいと思う」といった意見が寄せられた。これらの回答からは、一部の学生にとっては、特定の施策そのものよりも、多様性が日常の中で自然に受け入れられていることが重要であると捉えられていることがうかがえる。

より批判的な回答では、安全性や理解不足、大学の対応に関する課題が指摘された。例えば、「APUは十分な対応ができていないと感じる。学生は無礼な言動をしているのに、大学側は何もしていない」という声や、「まだカミングアウトできておらず、誰にも相談できない」といった孤立感や心理的負担を訴える意見もあった。日本語回答でも、「LGBTQに関する素朴な疑問を気軽に聞けて、適切な回答を得られる場がないため、話題自体を避けてしまう」という指摘があり、対話や情報共有の場に関する課題が示された。

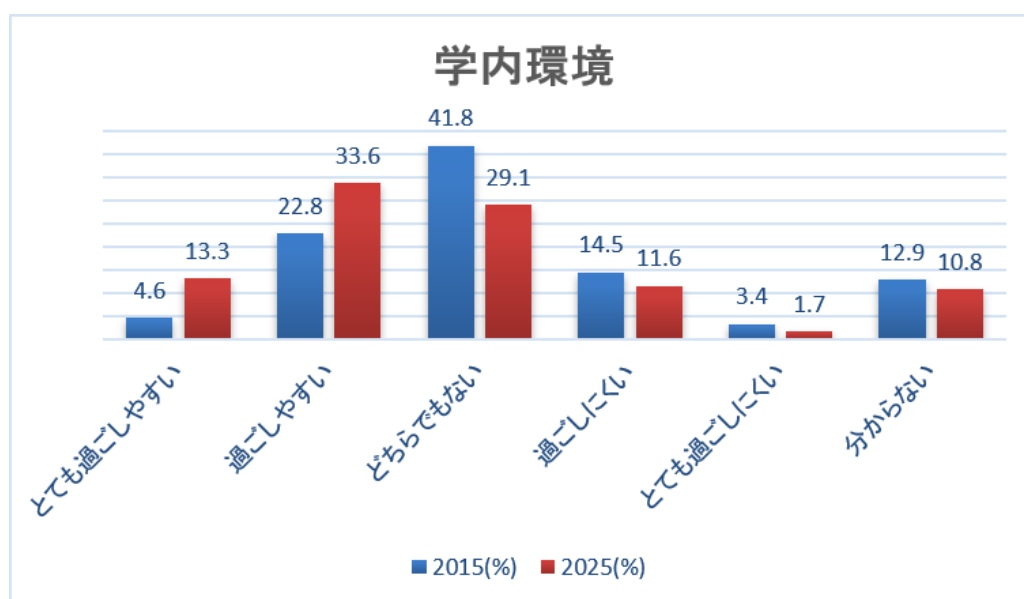
全体として、多くの学生がAPUを比較的オープンで支援的な環境として捉えている一方で、そのような安心感や受け止められ方は、すべての学生に共通しているわけではないことが示された。多様性が特別なものではなく、自然に受け入れられるキャンパス環境を実現していくためには、まず相互尊重と非差別に関する共通認識を広げていくことが重要と考えられる。そのためには、大学の方針や支援制度に関する周知をさらに進めるとともに、支援体制やインクルーシブな取り組みの可視化を高め、それらを日常的なキャンパス生活の中に根付かせていくことが求められている。

12. 2015 年と 2025 年の比較概要

12.1 10 年後の APU における学内環境

2015 年と 2025 年の調査結果を比較すると、LGBTQ+学生にとっての学内環境に対する認識は、全体としてより肯定的な方向へ変化していることが分かる。2015 年には、「どちらでもない」が最も多く（41.3%）、学内環境に対して中立的、あるいは判断が難しいと感じている学生が多かった。しかし、2025 年にはこの中立的な回答は 29.1%に減少し、肯定的な認識が大きく増加した。

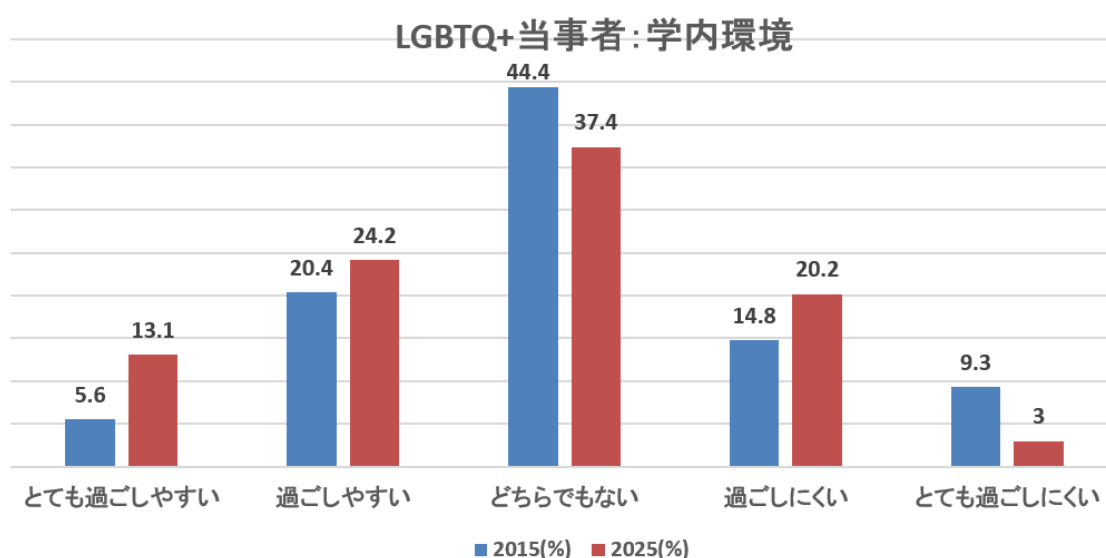
特に、「とても過ごしやすい」と回答した学生は、2015 年の 4.6%から 2025 年には 13.3%へと増加し、「過ごしやすい」と回答した学生も 22.8%から 33.6%へと増加した。一方で、否定的な認識は減少しており、「過ごしにくい」は 14.5%から 11.6%へ、「とても過ごしにくい」は 3.4%から 1.7%へと低下した。これらの傾向から、2025 年の学生は 10 年前と比較して、APU の学内環境を LGBTQ+学生にとってより支援的なものとして捉えていることがうかがえる。



12.1.2 10年後の LGBTQ+当事者学生の認識

LGBTQ+当事者学生の回答も、全体として肯定的な方向へ変化しているが、依然として課題は残っていることがわかりました。肯定的な回答は増加しており、「とても過ごしやすい」は2015年の5.6%から2025年には13.1%へ、「過ごしやすい」は20.4%から24.2%へと増加した。同時に、「どちらでもない」と回答した学生は44.4%から37.4%へと減少しており、中立的、あるいは判断が難しいと感じる学生は徐々に減っている。

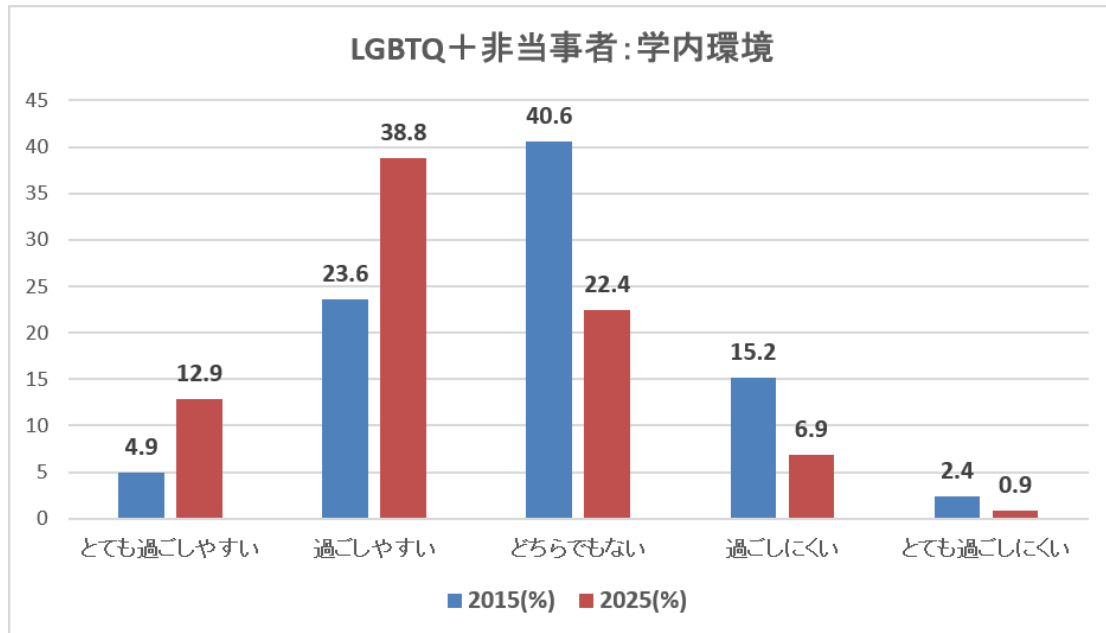
一方で、過ごしにくさを感じている層は依然として一定数存在する。「とても過ごしにくい」は9.3%から3.0%へと大きく減少したものの、「過ごしにくい」は14.8%から20.2%へと増加した。このことから、非常に過ごしにくいと感じる学生は減った一方で、日常的なキャンパス生活の中で不快感を抱き続けている学生も少なくないことが示されている。



12.1.3 10年後の非 LGBTQ+学生の認識

非 LGBTQ+学生では、より顕著に肯定的な認識への変化が見られた。「とても過ごしやすい」と回答した割合は 2015 年の 4.9%から 2025 年には 12.9%へと増加し、「過ごしやすい」も 23.6%から 38.8%へと大きく上昇した。それに伴い、「どちらでもない」は 40.6%から 22.4%へと減少した。

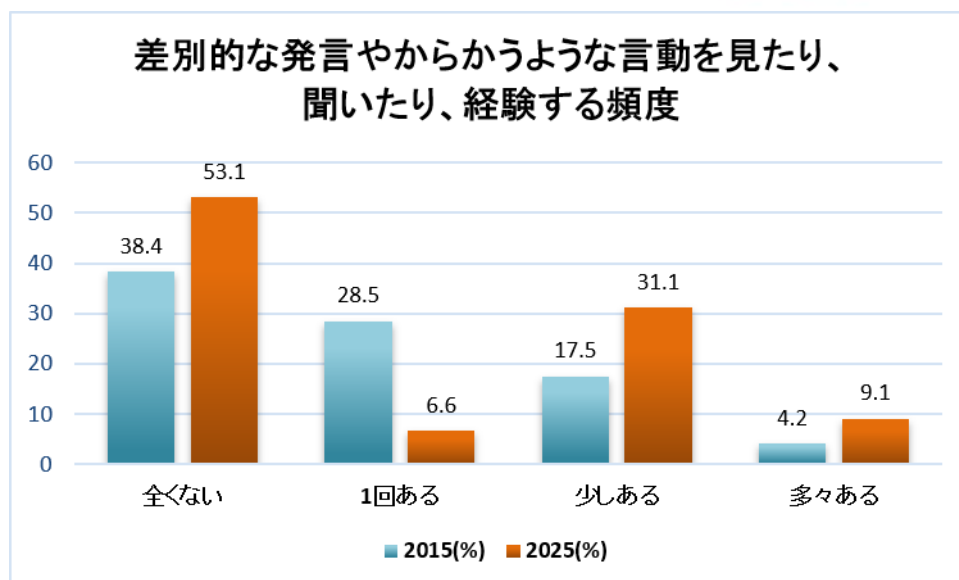
否定的な認識も大きく減少している。「過ごしにくい」は 15.2%から 6.9%へ、「とても過ごしにくい」は 2.4%から 0.9%へと低下した。これらの結果から、非 LGBTQ+学生は、2015 年と比較して、LGBTQ+学生にとっての APU をより肯定的で過ごしやすい環境と捉えるようになってきていることが分かる。



12.2 10 年後の差別的な発言やからかいの経験

2015 年と 2025 年の回答を比較すると、LGBTQ+に関連する差別的な発言や、からかい、いじめに遭遇した経験の頻度にも変化が見られる。「全くない」と回答した学生の割合は、2015 年の 38.4%から 2025 年には 53.1%へと増加しており、多くの学生が、表面的には差別のない環境であると認識していることがうかがえる。

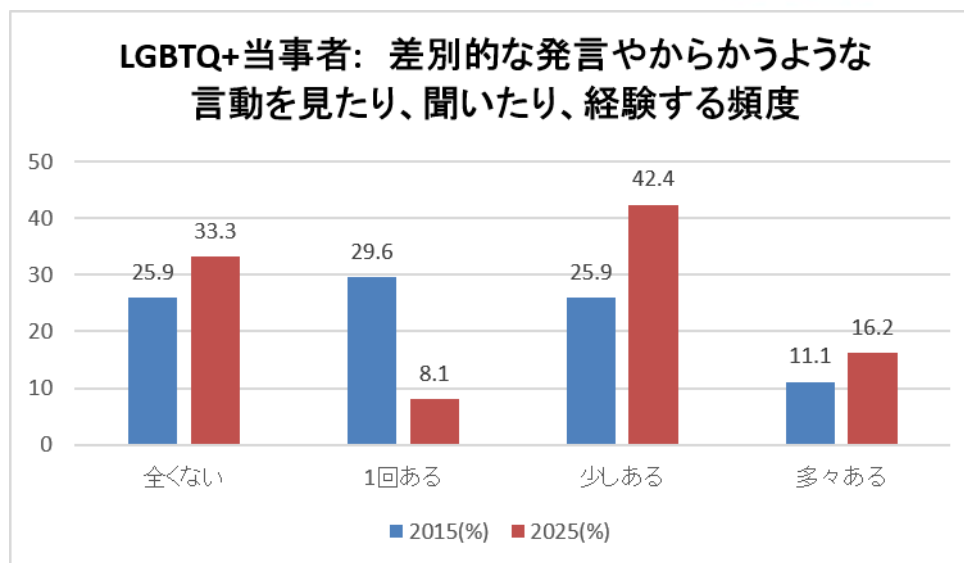
一方で、「1 回ある」と回答した割合は 28.5%から 6.6%へと大きく減少した。しかし、「少しある」は 17.5%から 31.1%へ、「多々ある」は 4.2%から 9.1%へと増加しており、複数回にわたる差別的な経験を報告する学生が増えていることが分かる。全体として、差別に一度も遭遇しない学生は増えているものの、遭遇する学生にとっては、それが繰り返し起こる傾向があるといえる。



12.2.1 10年後のLGBTQ+当事者学生の認識

LGBTQ+当事者学生においても、差別的な発言やからかいを経験する頻度には複数の変化が見られた。「全くない」と回答した学生は2015年の25.9%から2025年には33.3%へと増加しており、安全性や受容の面で一定の改善が見られる。一方で、「1回ある」と回答した学生は29.6%から8.1%へと大きく減少した。

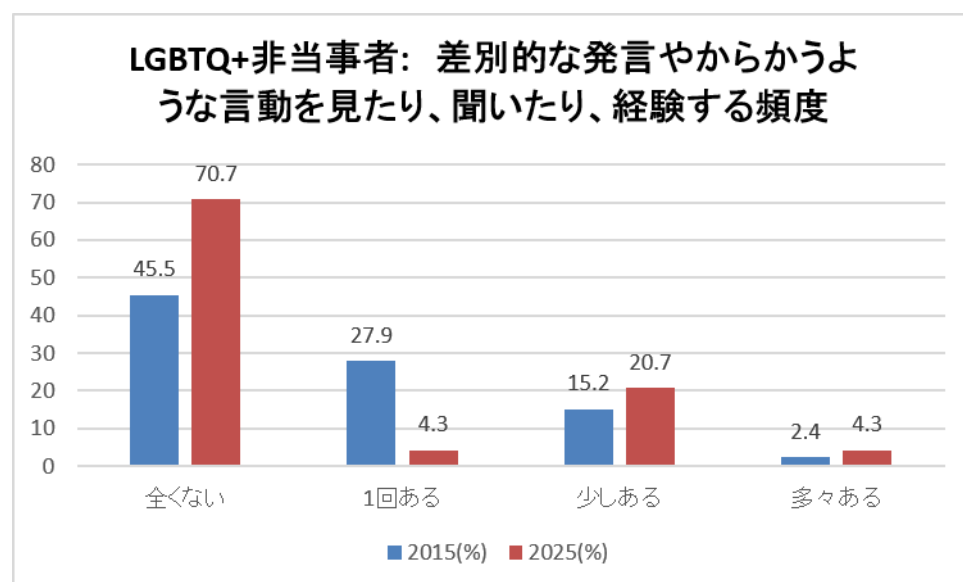
しかし、繰り返し差別を経験する割合は増加している。「少しある」は25.9%から42.4%へ、「多々ある」は11.1%から16.2%へと上昇した。これらの結果から、差別を一度も経験していないLGBTQ+当事者学生は増えている一方で、差別を経験する学生の中には、それが繰り返し起こっていると感じている人が多いことが分かる。



12.2.2 10年後の非 LGBTQ+学生の認識

非 LGBTQ+学生では、差別的な言動に遭遇しないと回答した割合が大きく増加した。「全くない」は2015年の45.5%から2025年には70.7%へと上昇した。また、「1回ある」は27.9%から4.3%へと大きく減少した。

一方で、「少しある」は15.2%から20.7%へ、「多々ある」は2.4%から4.3%へとわずかに増加した。これらの結果から、非 LGBTQ+学生の中でも、差別的な出来事を複数回目にしている学生は一定数存在しているものの、全体としては目に見える差別が減少していることが示唆される。



13. 総括

本アンケートの結果から、全体的には学内環境は肯定的に捉えている学生が半数以上いる傾向にあるが、LGBTQ+当事者学生は非当事者学生と比較して、学内環境を「過ごしにくい」と感じる傾向があり、自分自身を自由に表現することへの困難さや、自身の存在や意見が大学コミュニティの中で十分に反映されていないという感覚を抱えている学生がいることが明らかとなった。また、差別的な発言や言

動に触れる機会も相対的に多く、心理的安全性の面において課題があることが示された。

2015 年の調査と比較すると、APU の学内環境を肯定的に捉える学生の割合は全体として増加しており、LGBTQ+学生にとってより過ごしやすい環境になっていると感じる学生も増えている。しかしながら、非 LGBTQ+学生の認識と、LGBTQ+当事者学生の実験の経験との間には、依然として一定のギャップが存在している。

また、本調査では、「性の多様性に関する基本方針」や、スチューデント・オフィスによる相談窓口・支援体制について、その存在を十分に認識していない学生が一定数存在していることも確認された。こうした情報や支援体制の可視性・アクセス性の不足は、LGBTQ+学生が支援を求める際の不安やためらいにつながり、孤立感を強める一因となっている可能性がある。

13.1 今後に向けて

本調査からは、学生および教職員の双方が、APU における支援体制の充実に向けた具体的な方向性を示していることも明らかとなった。

学生調査では、特に以下のような支援の重要性が多く挙げられた。

- ・意見交換ができる場や機会の設置、およびコミュニティ形成の支援
- ・相談しやすい環境づくり
- ・正課・正課外活動において、多様な経験や背景を取り上げる取り組み

また、教職員調査では、以下のような支援の必要性が強調された。

- ・教職員を対象とした SOGI（性的指向・性自認）に関する研修の実施
- ・相談体制へのアクセス向上
- ・LGBTQ+に関するテーマや課題を扱う授業・教育機会の充実

今後、APU における学内環境をさらに向上させていくためには、既存の方針や支援体制を維持・発展させるだけでなく、それらが学内のすべての構成員にとって「見える」「利用できる」「実感できる」ものとなることが重要と考えられる。

本調査結果を踏まえ、APU では、相互尊重と非差別を基盤とした学内環境の実現に向け、以下の取り組みを進めていく。

1. APU における非差別方針のさらなる具体化
2. Student Support ページ (<https://www.apu.ac.jp/studentsupport/>) を通じた、多様なニーズを持つ学生に対する支援制度・相談窓口の周知強化
3. 多様なニーズを持つ学生への理解と対応力向上を目的とした教職員向け研修の実施
4. 多様性への理解を深めるためのガイドブックの作成
5. 非差別や多様性について考える機会となるイベントの実施

これらの取り組みを通じて、APU は、すべての学生が尊重され、安心して学び、生活し、それぞれの可能性を十分に発揮できるインクルーシブな学内環境の実現を目指していく。